

赤い三角屋根の会（国立駅舎を活かす会）

活動のテーマ 合意形成を目指す模型づくり

キーワード

赤い三角屋根 保存 模型作成

団体・活動概要

赤い三角屋根が印象的な国立駅舎は、1926年（大正15年）に国立大学町の開発を手がけた堤康次郎によって鉄道省に寄付された。都内では原宿駅について2番目に古い木造駅舎だったが、老朽化のために取り壊される計画がJR東日本から発表された。団体は、国立のまちを象徴し、長い間まちの歴史を見守ってきた駅舎の価値や未来像を市民が主体的に考え、議論するために、2001年に建築士を中心として設立された。単に保存を訴えるのではなく、行政、企業、市民等様々な立場の人々がお互いを尊重しながら意見を出し合い、よりよい駅や駅前空間を創造するテーブルづくりを行うことを活動の目的に掲げた。これまで他の主体と連携しながら（1）駅舎勉強会（2）市議会への陳情提出（3）市長、都知事、JR東日本社長に署名と要望書を提出（4）世代を超えた駅舎展、駅前クリスマスコンサート等を開催してきた。

活動対象地域

東京都国立市
面積：8.15km²
人口：74,000人



助成年度の活動概要

駅舎をどのように保存（活用）するのか、ばらばらなイメージを整理・統一し、誰にでもわかりやすい具体的なイメージを提示するために、駅舎とその周辺の模型づくりを行った。模型を作成することで、広く駅舎保存（活用）意識を喚起し、イメージの相違点を明らかにし、合意点を探ることを目的とした。

活動の特徴・ポイント

1. 駅舎を国立のまちづくりの原点と捉えている
2. 保存派市民だけでなく、解体派市民、企業、行政等様々な人が議論することを重要視
3. 多様な主体と連携したイベントや協議会、検討会等に関与

赤い三角屋根の会（国立駅舎を活かす会）

代表者 伊藤 孜

連絡担当者 中町 仁治

住所 〒186-0002 東京都国立市東2-26-5 赤い三角屋根の会事務局

TEL 042-571-5071 FAX 042-571-3789

e-mail

ホームページ <http://www.vrenpo.com/kunitachi/station/>

1. 活動の背景・目的

JR国立駅は、大正末から進められた国立開発の中で放射状道路や街区の起点に計画され、以後「国立の顔」としてまちの歴史とともに年齢を重ね、市民に親しまれてきました。しかしながら、中央線連続立体交差事業の進捗に伴い、取り壊しが発表されました。三角屋根が印象的な駅舎は、80年以上経った今も大学通りのアイストップとしての役割を果たし、国立の町を象徴する建物となりました。そして市民はもちろん、駅を利用される方々にも愛されています。

その駅舎が工事の邪魔になるという理由でなくなるようとしているのです。

私たちは、この駅舎問題を契機に国立市が開催した「駅を活かしたまちづくりフォーラム」に参加してきました。その過程で、国立駅舎の存在や価値を駅前空間の中で活かしていくことの重要性を痛感しました。そして、市民が主体的に声をあげるべきだと考え、2001年6月13日に市民の会を立ち上げました。



大きな半円形の窓と三角屋根が特徴的な国立駅舎

赤い三角屋根の会～国立駅舎を活かす会～〈設立趣意書〉より

わたしたちは、国立駅舎を愛し、なるべく今の形で駅舎が今後も残り続け、活かされ続けることを望んでいます。同時に、駅や駅前空間を巡る様々な意

見に真摯に耳を傾け、多くの国立市民が議論する機会を設け、市民の総意と創意でよりよい駅と駅前空間の将来像が実現することを望んでいます。なぜなら、国立の歴史を見守ってきた駅舎の将来像を考えることは、ひいては国立のまちの将来像を考えるとだと思うからです。

今のままでは、何の議論もなく、赤い三角屋根は消えていきます。何もしなくて、何も考えなくて良いのでしょうか？

国立のまちづくりを誰の手に委ねていけばいいのでしょうか？

今こそ話し合ひましょう、駅舎の未来を、国立の町の未来を。

2. これまでの実績と駅舎をめぐる動き

2001年

「赤い三角屋根の会」世話人会発足

駅舎への思い、街頭アンケート実施

「赤い三角屋根の会(国立駅舎を活かす会)」発足
国立市民まつり参加(駅舎保存活用の署名開始)

2002年

駅と周辺勉強会(意見交換会)開催

市主催夏休み駅親子見学会に協力、意見交換会開催

全国立市議(病欠1名を除く)と懇談

国立市長、東京都知事、JR東日本社長にむけて
国立駅舎保存活用のための署名(5,034名分)と
要望書を提出

市長と懇談

国立駅舎保存活用に関する陳情を市議会へ提出

市議会内建設委員会にて陳情説明

全会一致にて国立駅舎保存活用に関する陳情が採
択

国立駅前クリスマスコンサート開催(大成建設自
然・歴史・環境基金 助成金による)



1926年に建てられたときの姿 英国田園都市の影響を受けている

2003年

国立市公民館にて当会作成の模型を提示し、J R、都に説明
国立市「国立駅周辺まちづくり検討会」に代表1名を送る
国立市議会内にJ R中央線高架化に伴う国立駅周辺まちづくり特別委員会発足
「国立駅舎保存の会(国立市商工会をはじめとする6団体による組織で、当会もその一員)」設立、募金活動開始
市内小学校の総合の時間で駅の説明会
駅舎見学会開催

2004年

国立市まちづくり推進課と懇談
「国立駅周辺まちづくり検討会」による提案書を国立市長へ提出
国立市まちづくり推進課に現状ヒアリング

2005年

保存の会 市長、市議会議員向けに要望書提出:
「国立駅周辺まちづくり検討会」による提案にもとづいた国立駅舎保存活用の実現にむけて
保存の会と市長による懇談会実施
国立駅周辺まちづくりフォーラム開催(一橋大学のゼミと赤い三角屋根の会共催)
国立市議会にて、曳きや予算を含む補正予算否決
保存の会 市長に要望書提出
全市議会議員に曳きや予算否決に関するアンケート実施
市議会にて曳きや委託設計料を含む補正予算再度否決
国立駅周辺まちづくりをめぐる駅舎保存に関する陳情採択

2006年

国立駅開業80周年記念イベントに協力(主催:国立駅舎開業80周年をお祝いする会)



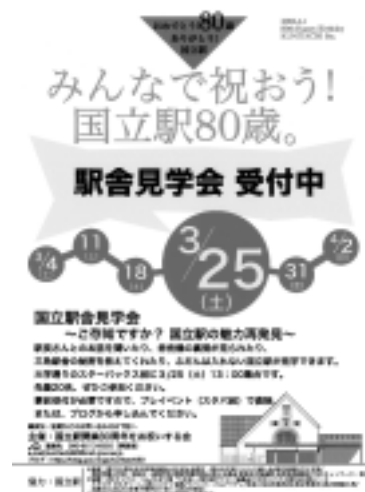
国立駅開業80周年記念イベントの様子

3. 助成年度の活動内容

国立駅周辺模型作成およびプレゼンテーション

2006年3~8月誰にでも理解しやすい模型を市民の参加によって作成した後、市役所ホールに展示し、広く市民に対してのプレゼンテーションを行い、

駅舎保存活用にむけての関心を問いかけてきました。また、その模型は「国立駅周辺まちづくり懇談会(学識者、商業者、市民代表、関係諸団体、そして保存活用にむけて活動している市民団体を交えた会)」に提出し、高架駅舎のデザイン検討、基本方針の確認、そして今後の進め方等に積極的に活用されました。



国立駅開業80周年記念イベントの案内



市役所ホールに展示された模型

模型作成のいきさつ:

2003年度に駅周辺自治会、商工会、市民団体の各代表、公募市民、学識経験者の計10名による「国立駅周辺まちづくり検討会(本会もメンバー)」が結成さ



作成した模型 1

れ、市長の依頼を受けて約1年間ワークショップ、インタビューにより多くの市民の意見を吸い上げながら、まちづくりの方向性を探ってきました。その検討の成果として2004年に「国立駅周辺まちづくりに関する提案書」が市長に提出されました。そこで提案されたまちづくりのコンセプトを多くの市民、そしてさまざまなイメージを持つ商業者に対してモデルの作成を通して具体的なイメージを提示し、市民、商業者、行政、関係者の合意形成を図ることを目指しました。

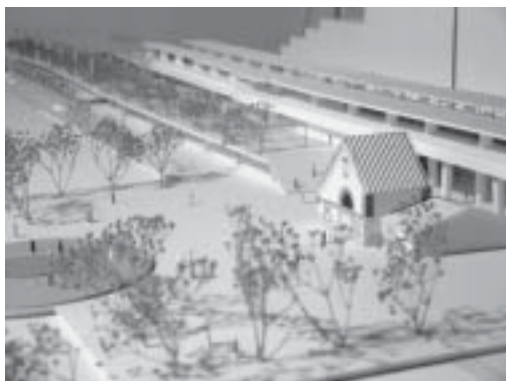
協力者：

他の市民団体(くにたち・まちづくり市民連絡会)のスタッフの参加を得ました。その他に検討会を通して、多くの市民、商業関係者にも声をかけました。

市民参加の効果：

まちづくりコンセプトの理解と具体的なイメージの共有、コミュニケーションの醸成と合意形成が図れました。

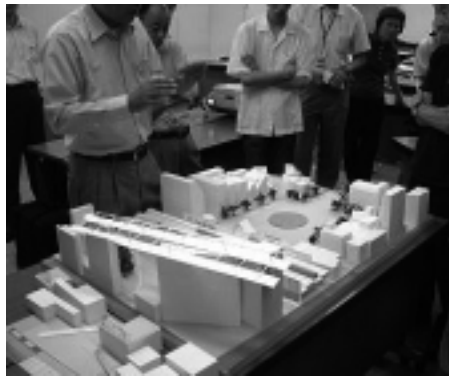
市役所ホールに展示されることになったいきさつ：当会の代表が「国立駅周辺まちづくり検討会」のメンバーでもあり、モデル作成は常にオープンに進められました。そのことから、さまざまな場面(新JR国立駅ファサード検討、駅前広場デザイン検討等)で使用され、その検討のプロセスを多くの市民に広報し、かつ積極的な参加をお願いしようという意味で、市役所ホール展示を提案させていただき実現しました。これは、現在進められている新駅デザインの場面でも、市民説明会の場面でも引き続き活用されています。



作成した模型 2

市、JRの反応：

市にとっては具体的な模型があることで、市民の一層の理解とさらなる意見交換ができる有効な道具となりました。そしてなかなか情報を出していただけないJRサイドに対して、具体的な国立市の考え方と駅周辺まちづくりへの熱意を伝えていると思われる(様々な交渉の場に模型を持って行っていただくことをお願いしています)。



市民説明会で使用された模型

国立駅開業80周年記念イベントに協力(主催：国立駅舎開業80周年をお祝いする会) 2006年3～4月
駅と駅周辺の空間を創造するためのテーブルづくりの一環として計画され、実行されました。イベントの具体的な内容は、模型展示、駅舎今昔写真展、駅舎塗り絵、駅舎への感

謝のメッセージ作成、駅舎グッズ販売、駅員の案内で行われた駅舎見学会、市民や市議会議員等多くの人が参加した深夜の駅舎おそうじ会等です。フィナーレは、駅舎誕生後初めての試みとなった駅舎構内コンサートで締めくくりました。この催し物は、赤い三角屋根の駅舎の80周年というキーワードのもとに、まさしく合意形成の“きっかけ”となる催し物となりました。

国立市長、国立市議会議長、国立市議会議員に対して「国立駅舎保存のための即時の取組みに関する要望書」を提出
2006年7月
駅舎をめぐる動きを市民に伝えて欲しい旨を伝え、市長と面談しました。

国立新駅デザイン説明会(市民、商工会、学識者、関係諸団体で組織)へ参加



国立駅開業80周年記念イベント「おそうじ会」の様子

2006年4～8月

当会はメンバーとして新駅のデザイン検討・提案に関わり、結果を市がとりまとめ、国立市の要望としてJR東日本に提出しました。その際、合意形成の道具として当会が作成した模型が使用されました。

市議会議員と語る緊急会議開催(主催:(仮称)えきれん(当会と他団体による組織))

2006年9月

赤い三角屋根の会が提出した「国立駅舎保存活用に関する陳情」をもとに議会をあげて採択したはずのまちの象徴《国立駅舎》が、ここにきてまさに政治の道具にされ、取り壊されようとしている状況に直面し、市民と与党、野党関係なくしっかりと議論し、市民と議会が一体となり取り組んでいけることをめざし、開催しました。

“はがき大作戦”を展開(主催:えきれん)

2006年9～10月

国立出身の絵本作家の降矢奈々さんの協力を得て、はがきに降矢さんのイラストを印刷したものを作成し、JR東日本、東京都の関係各課に市民が駅舎への想い、活用の願いを綴りました。約一ヶ月間の週末のみの開催でしたが、約500通の想いがそれぞれに届けられました。

国立市長、国立市文化財保護審議委員に対して

「JR国立駅舎の市文化財指定に関する要望書」を提出

2006年9月

本来、文化財指定の考え方からすれば、どの部材を保存するかではなく、建物全体ではじめて文化

財的価値があるはず。今回の解体が、「レプリカに限りなく近い本物」にならないよう、以下を要望しました。



「三角屋根の初代国立駅舎、最後の終電」の案内

1. 将来の国立のまちづくりのために、解体復原にむけて建物全体を保存すること
2. あわせて、駅舎の文化財的価値に関わる十分な調査を行うこと
3. サステナビリティを含めた将来の国立の発火点となるよう、駅舎の創建時の姿に関わる復原調査をおこなうこと

“三角屋根の初代国立駅舎、最後の終電”ささやかな催しを開催

2006年10月8日(赤い三角屋根の駅舎の最後の日)このささやかな催しは、80年間街を見守ってくれた駅舎に感謝の気持ちを表すとともに、5年後にまたこの駅舎に会えることを願い計画されました。

イベントの具体的内容は、

約束キップの配布(5年後に三角屋根の下で再会しようという願いを込めて)



赤い三角屋根の駅舎の最後の日の様子

駅前空間において映像と音楽による5年後に再会するためのメッセージの発信(駅開業時の駅周辺を撮影した映像を特設スクリーンに映し出し、80年の歴史をしのんだ)

市議会議員、市長立候補予定の皆様への“赤い三角屋根の初代国立駅舎の復原”についてアンケート調査の実施、および市民への公開

2007年3～4月



作成した模型
3

国立市議会議員・市長選挙において、赤い三角屋根の旧駅舎の復原が一つの争点となっていることを鑑み、まちづくりと旧国立駅舎についてどのようにお考えをお持ちかをお訊かせいただくこと、そして市民にその内容を公開することを目的として実施しました。

その後の駅舎をめぐる動き

2006年9月の国立市議会第二回定例会にて、国立駅舎を「丁寧に解体し、保管すること」が決議されました。10月には電気設備等の付帯設備から撤去が始まりました。その後、市教育委員会では、国立市文化財保護審議会でも国立駅舎の文化財について指定が適正であるとの答申を受けて、定例教育委員会で、国立駅舎を有形文化財(建造物)に指定することを決定しました。

文化財として指定された理由

「基本的な構造、いわゆる軸組み、小屋組みがよく残っている。明治から大正期にかけての典型的な構造技法であるキングポストトラス等、技法的、技術的に重要である。」

11月に入り、三角屋根駅舎本体の部分に足場が架けられ、三角屋根の小屋組み部分は、正面の大きな部分から解体が始まり、その後、西側の部分へと移り、小屋組みの下部になる柱や梁が順次解体され、12月末には全て撤去されました。

旧国立駅舎は、国立市が部材を保管し、ほぼ元の場所に木造で復原することを目指すこととなりました。しかし、復原用地確保に伴う財源や駅舎活用方法の具体策は、不透明なままです。

4 . 活動の成果と課題

1) 成果

様々に変化していく状況の中で積極的に活動を展開しました。目的に応じたいくつかのタイプの模型を作成し、それをもとに話し合いの場を設定し、だれにでもわかりやすいプレゼンテーションが行えたことは非常に効果的であったと考えられます。組織的にも赤い三角屋根の会だけにとどまらず、より広い活動を展開できるように、他の市民団体、そして駅舎に想いを寄せる個人とも協働することができました。

2) 課題

「国立の顔」として市民意親しまれてきた赤い三角屋根の駅舎を共通言語に、市民をはじめとして様々な立場の人々がお互いを尊重しながら、話し合い、知恵を出し合うことによって、よりよい駅と駅周辺そしてまちづくりを創造してゆくという目的が、駅舎が解体される(市の文化財として指定され、部材は元の位置に復原をめざして保管されている)という想定外の事態で大変難しい状況となりました。なぜ保存するのか、国立の将来のまちづくりに対してどのように活用していくのか等、本来もっとも議論されなければならないことがないがしろにされて、政争の具となってしまったことも大きな原因と考えられます。

今後、いかに赤い三角屋根の駅舎が国立のまちの将来に必要な不可欠のものであるかをより積極的に市民、行政、市議会等にあらゆる手段でアピールしていきたいと思います。

5 . 今後の展開

1) 団体や活動の方向性・将来像

5年後の中央線連続立体交差事業の完了時まで、市民、商工業者、行政の合意形成をさらに図りながら、赤い三角屋根の旧国立駅舎が解体前の位置に復原されること、そして国立のまちづくりの発火点に



西側三角屋根 小屋組み



正面三角屋根 小屋組み(西側)

なるように活動を継続します。そのためには、行政サイドの積極的な取り組み、特に市民対しての広報のしかた、情報開示が重要なポイントの一つとなってきます。また、市議会等の政治の場での駅舎を核としたまちづくり構想を市民とともに真摯に話し合う場を設定していきます。

2)目標とする組織体制、資金計画

より広い市民の参加(現在進行中である)と行政、商工業者などが参加できる組織体制を目指していきます。資金計画については、復原そして周辺整備に関して基金等の設置を考え、国立市民のみならず、日本中に呼びかけながらより広い活動を目指していきます。



国立駅開業80周年記念イベント「駅舎見学会」の様子